

紹介

原田芳起著『平安時代文学語彙の研究』

竹内美千代

昨秋、原田教授の「平安時代文学語彙の研究」が風間書房より出版され、その手堅い論考と新境地を拓く創見とは夙に学界の認める所である。今更紹介とは遅きに過ぎるのであるが、昨年度に出された本学教授の著書であり、浩瀚な専門書であるから、誰もが通読するというわけのものでないと思うので紹介することとした。

原田教授の国語学研究は、語法・意味・解釈・位相・方言の各分野にわたる中広いもので、早くより学会や雑誌・著書等に活発に発表していられる。本学に來任せられて以來の十年余は、主として「平安文学」を対象に研究していられた。本書はそれらの成果をまとめて江湖に問われたものである。

私は本書を読んで人ごとならぬ喜びと満足とを覚えたのである。それは私が二十年來心に抱きつつ力及ばず果せないでいる「源氏物語を中心とした平安朝物語の語彙語法の研究」が、本書によつて実に見事になされているからである。私などの及びもつかない周到綿密な調査と、透徹した洞察力とで

未解決な古語の謎を片端から解明される楽しさは、胸のすく思いがする。既に埋没した古語を発掘し、その時代の言語の語彙に復元して正しい解釈を下す作業、いわば過去の言語の正しい姿を求める実証的研究を丹念に積み重ねつつ、確実に語彙の背後にある統一的な体系を探つて行かれる努力と洞察力には頭を下げずにはいられない。本書は著者の過去数十年間の研究の一応の集大成ともいふべきものである。

本書の内容はほぼ独立した論考二十七章を読み進んでいくうちに、△平安時代の文学語彙の実態▽が理解出来るように仕組まれている。その項目は左のとおりである。

第一部 序 説

1 古典語彙研究の方法（語彙—語彙自覚の発生—同義語・類義語・対義語—位相論への一つの見地）

2 歌語論序説（歌語—歌語意識—歌語と俳言—歌語の伝統性—歌語の自由性）

3 文学語彙としての俗語（俗語—言語描写の写実度—）た

うぶ」の俗語性―「たまふ」「たうぶ」の消長―歌謡と俗語―俗語的なもの―今昔物語の言語

4 類義語の意味論的処理「やさし」「はづかし」の間(同義語と類義語―「やさし」「おもなし」「はづかし」の基本的な意味―「はづかし」「やさし」の意味変化の過程―栄花物語の「やさし」の意義―大鏡の「やさし」の意義―中世の「やさし」の意義―「おもなし」の意義の転換―「おわりに」)

5 語彙事実としての対義語朝霧・夕霧・夜霧(夜霧という語―万葉の訓「ヨギリ」への疑い―「よぎり」の登場―「ゆふぎり」の古義)

6 解釈における誤認の契機・音韻・表記・意味(「なぜうに」「なでふ」「なぜに」)

7 解釈に前提されるもの「声のとつかんずる調子」(各時代の語彙的辞書があつたら―声のとつかんずる調子―「とづく」の語史)

第二部 意味

1 活用形式の分岐派生と意味(形態の変遷と意味―「わする」の古活用―隠るの古活用と意味―「はるく」の活用と意味―「さすらふ」の活用と意味―「ほころぶ」の活用と意味)

2 形態的区分と意味的区分(万葉の「しのぶ」と「しのぶ」―平安中期までの「しのぶ」群の語彙的事実について―「忍ぶ」四段の系譜―四段形式の拡大)

3 共時態における語義の統一性「おほろけ」の意味の変容(意味の反転とその諸契機―「おほろけ」の清濁―「け」と「げ」―意味の反転と諸注―文型による整理―掛け詞に現れた「おほろけ」の特殊性―特殊例の解釈―各文型の分布)

4 副詞「ことしも」の意味について(更級日記の「節」―「ことしも」やうに」の使用例)

5 「うちに」が接続するに文ついで文型と意味(接続形式について―「うちに」接続の文の型と意味の型―土佐日記における「うちに」の文の型―落窪物語における「うちに」の文の型―宇津保物語から―蜻蛉日記から―源氏物語の「うちに」の文の型と意味)

6 「いづくはあれど」考 文型と意味(佐伯博士説ののち―「いづくはあれど」と「いづれもあるを」の比較―こそ・だに・は・も)

7 語義特殊化の過程けし・けしう・けしからず(形容詞「けし」―副詞「けしう」―「けしうはあらず」の意味のさまざま―「けしからず」の意味の成立過程についての臆断)

8 「おはさふ」「おはさうず」存疑(はじめに―「おはさうず」類の構造―複数主格の問題―「あふ」との比較―むすび―付記)

9 「副詞」「かつがつ」の系譜(方言に残存する「かつがつ」―宣長説批判―「かつ」から「かつがつ」へ―副詞

「かつ」の同系語―「たまればかてに」考―「がてら」「がてり」

10 文学語彙の周辺「しこる」「ししこらかす」私注(論のあらまし―「しこる」「あきじこり」―諸説批判―「しこる」の意義―「ししこらかす」の解釈―「しこりこめやも」の解釈―「あきじこり」の解釈―古代の「しこ」の意義)

11 注釈の混態について「あふなあふな」と「おほなおほな」(「あふなあふな」の意味―「あふなし」の意味―「あふさわに」―「おほなおほな」の意味)

12 「中の十日」の意義をめぐる問題(源氏物語の用例から―中世の言語における「中の何日」という数えかた―天禄三年八月歌合序の問題―平安朝における「中の十日」類の意義―千載和歌集奏覧の日時―「中の何日」式への転換過程)

第三部 位 相

1 上代語彙における「しか」と「さ」との交渉(序―万葉語について―宣命の言語について―訓点語の場合―伊勢物語の「さ」―竹取物語の「しか」と「さ」―土佐日記の「しかれども」―宇津保物語の言語描写―源氏物語における「しか」―「しかじか」と「ささ」―文体的要素としての「しか」―今昔物語の「しか」と「さ」―宇治拾遺物語の「しか」―平家物語から―徒然草の「しかも」―歌語の場合)

2 平安朝数名詞考 仮名文における表記とその読み方(問

題点―表記の観察―「十日」類の読み方―「十日よひ」等の処理―漢字表記の数名詞をめぐる問題)

3 「ずちなし」考(「すちなし」「ずちなし」の弁―「すべなし」「ずちなし」の弁―「すべなし」の感情的陰影―大鏡の「ずちなし」―その他の作品から―「すちなし」について)

4 平安文学と漢語 天下・世界・世間(「ていけ」「てんけ」の疑い―「天下」呉音説―漢吳音両形の共存―「あめのした」―平安文学語彙と「天下」―「世界」と「世間」)

5 宇津保物語の中の漢語(はしがき―漢語彙弁証の基礎的要件―「ふせう」とのはず―解―「天下」呉音説補考―「けうさう」考―「かんでう」考―「闕巡」考―本文批評と漢語―特異にみえる漢語)

6 源氏物語における漢語彙の位相(女性と漢語―漢語の表記をめぐる問題―漢音と吳音(一)、(二)、(三))

7 源氏物語漢語彙弁証(「さが」字音説への疑い―「きやうざく考」―「せしうなる物の師」考)

8 漢語彙研究の一課題 漢語らしさをめぐって(漢語彙研究の一課題―「たいだいし」考―「さうぎょうし」考―「らうたし」「らうらうじ」考―「びびし」考)

国語学・解題関係著者論文目録

事項索引

語彙索引

右のように多様な論考が盛られている。簡単に二、三感想

を記すと、第一に資料が豊富であり、自在に駆使し尽されていることである。近年索引の書が次々刊行されて語彙研究がなし易くなつたが、宇津保・今昔・落窪・大鏡・榮華・等索引もなく、錯簡があつたり大部な書であつたり通説の困難なものがまだまだ多い。著者はそれらの多くの作品から適切な用例を意のままに引用している。それは著者が日頃から平安文学作品の隅々まで、如何に通曉していられるかを物語るのであり、和名抄・類聚名義抄・雅言集覽・日仏辞書・日ボ辞書等の古辞書は勿論、歌学歌論書・訓点資料に至るまで博搜しているのには驚嘆する次第である。

第二には立論の鮮やかさである。箇々の事象については先學者の論を注意深く批判し、最近の学界の所説をも取り上げ、独断を避け理路井然と論断されている。疑わしきは後考を待つ態度で所信を表明される所、説得力があり卓見が随所に見られる。将来定説とされるところと思われるものも少くない。例えば「ゆふぎり」「声のとつかんずる調子」「かつがつの系譜」「あふなあふなとおほなおほな」「中の十日」「天下(てんげ)」などの論は動くまい。

原田教授はもともと寡黙な方であるが、著書にもそれがあらわれている。本書の総論というべき序説「古典語彙研究の方法」の章は、著者の蘊蓄を傾けもつと詳細に述べてほしかつた。「語彙自覚の発生」の項など、自らいわれているように、余りにも「点描的な論の進め方」に過ぎている。私は本書を貫く方法論で冒頭を飾つてほしかつたと思うのである。

しかし通説後再びこの章を読み返してみると、著者がいかに苦心してこの項を記しているかがよくわかる。一行か二行に要約された説明なども、後章の意味論・位相論の一章に相等する大きな論考の精髓が凝縮されているのである。

第三は文章の妙味ということである。こうした専門的な論考はいきおい無味乾燥な文章になりやすい。だが本書は決して味気ない文章ではない。わかりやすい達意の文章であり、現代的なセンスを持つたすつきりした文体である。そこには著者の細かい注意が行き届いている。その上用例を選択して、軽妙なスケッチ風の解説がなかなか気が利いている。「俗語」や「今昔物語の言語」の章などユーモラスでさえある。

以上あらまし紹介したが、本書は平安文学語彙論として、国語史の一分野をになう研究書であると共に、大著ながらも極めて親切なハンドブックとして、平安文学作品の読解の鍵を与える平安文学辞典でもある。巻末の事項・語彙索引はそうした役目を果す上に有効であろう。著者は「本書は平安時代文学語彙論としてはその序論の序論である」と謙遜しているが、老大な平安文学語彙の研究には、なお数多くの問題が残されているわけである。どうか自愛自重されて更に未解決な問題にも手をつけられ、他日の大成を期待してやまない次第である。

(A五判・六六四ページ 昭和三十七年九月十五日刊
四、五〇〇円 東京都千代田区神田神保町一ノ三四
風間書房) (一九六三・七・二〇)